

日本福祉文化学会  
「福祉文化現場セミナー in 新潟市西蒲区中之口」  
～口に絵筆をくわえて水彩画を描く岡村佐久一さんから学ぶ～

「20年前の岡村佐久一さんとの出会いが今に続き、そしてこれからも…」

日本福祉文化学会理事（総務委員会担当） 渡邊 豊

私と岡村佐久一さんとの出会いは2000年に遡ります。

この年の4月から、当時勤めていた新潟県社会福祉協議会で毎月発行している機関紙『福祉にいがた』の編集を担当することになりました。

表紙の写真は、機関紙の印刷をお願いしている会社が用意した候補から編集担当者が選び掲載していましたが、私が担当することになって、新潟県内の作家の絵を掲載したいと思い、それまで気になっていた岡村佐久一さんに電話をかけてお願いをして、その数日後に西蒲区巻町（現在は新潟市西蒲区）の自宅を訪ねて改めて説明をして快諾をしていただき、その日のうちに表紙に掲載する絵を岡村佐久一さんと奥様と、絵画に込められた思いやエピソードを伺いながら選びました。

あれから20年が経ち、今回、中之口先人館で開かれた絵画展の最終日に日本福祉文化学会（新潟福祉文化を考える会）の五十嵐真一理事、関矢秀幸前理事、五十嵐勝会員とともに伺ったところ、会場入り口で来場者を迎えていらっしゃる岡村佐久一さんと奥様に、私の方から挨拶をする前に奥様の方から「渡邊さん」と声をかけていただき、「20年ぶりにお会いするのに、覚えていらっしゃるのか」と感動させられました。

岡村佐久一さんの了解を得て、会場に展示されていたほとんどの絵画を写真で撮り、このたびの日本福祉文化学会のホームページに掲載をして、私が新潟医療福祉大学社会福祉学部2年生約130人に対して授業を行っている「地域福祉論」において、パワーポイントで絵画と絵画へのコメントを映し出し紹介をしました。

『福祉にいがた』での岡村佐久一さんの絵画掲載がきっかけとなり、それから20年間にわたって現在も、『福祉にいがた』には新潟県内の作家の絵画や写真が掲載され続けており、読者から好評をいただいています。

15年程前には、柏崎市社会福祉協議会に勤める関矢秀幸さん（前日本福祉文化学会理事）から、雪国の民家を描く画家早津剛さんの絵画の『福祉にいがた』への掲載のリクエストがあり、四季を通じた新潟県内各地の集落の茅葺民家の風景を描いた絵画の掲載が実現したこともありました。早津剛さんは私の親戚であり、早津剛さんの魚沼市の自宅に隣接するギャラリーで「福祉文化現場セミナー」を行い、早津剛さんから絵画の解説をしていただいたりもしました。

ちょうど数日前に、早津剛さんから「荻ノ島の家」という題の茅葺民家が描かれた絵葉書

が自宅に届きました。五十嵐真一理事、関矢秀幸前理事、五十嵐勝会員の地元、柏崎市高柳の秋を迎えた風景の絵画です。この地で、「福祉文化現場セミナー」を開催したくなりました。いかがでしょうか。

早津剛さんの絵葉書には、「－雪国の民家－早津剛小品展」の紹介が記されています。

新潟市中央区の万代島ビル（朱鷺メッセ）の「アートギャラリー万代島」で11月23日から12月5日まで開催されます。こちらも急遽「福祉文化現場セミナー」として訪ねて、また学会ホームページで紹介したいと思います。早津剛さんの絵画を楽しみにしててください。

私、関矢秀幸さんの報告とともに、岡村佐久一さんが描いた絵画、そして絵画のコメントを紹介します。このコメントは岡村佐久一さんが口に絵筆をくわえて書いたものと、書道家である奥様が代筆したものがああります。一文字一文字に込められた思いも感じていただければと思います。

## 「夫婦で奏でる恋するフォーチュンクッキー」

関矢 秀幸(新潟福祉文化を考える会 前日本福祉文化学会理事)

(岡村佐久一水彩画展)

岡村さんは、1956年新潟市西蒲区仁箇に生まれる。1979年国立宇都宮大学工学部卒業。1984年結婚。全日本空手道連盟二段取得。1994年交通事故で首を骨折し、手足の自由を失う。1995年口に筆を加え、文字を描き始める。1996年口に筆を加え、絵を描き始める。1997年2年6カ月の入院生活を終えて退院。現在に至る。

このように、交通事故で障害を負い、口にくわえた絵筆で水彩画を描いている岡村佐久一さん(65)の展覧会が、同区の中之口先人館で開かれた。我々も渡邊豊理事の発案で、岡村さんの生きざまを学びたいと、見学訪問することとした。幸いにも、我々が見学した日は、岡村さんご夫妻も会場に来ており、お話をお聞きすることができた。岡村さんの絵は、風景や季節の花などを温かみのあるタッチで描いた作品が多く並んだ50点の作品は来館者の目を楽しませていた。

岡村さんは38歳の時に交通事故で頸椎(けいつい)を骨折し、手足が不自由となった。2年6カ月の入院生活中に口にくわえた筆で文字を書き始め、その後絵にも挑戦。絵が好きになり、退院後は自宅で創作を続けてきた。家族に撮影してもらった写真や庭に咲く花などをモチーフに、絵筆を丁寧に口で動かして描いているという。

岡村さんは「家族や多くの人の助けがあって絵が描けること、生きていることに感

謝している。見てくれる人の気持ちがほんわりと和むような絵を描いていきたい」と語っていた。

### (地元での個展から)

岡村さんの絵は、近隣のギャラリーや中学校で、何回か講演、個展などが開かれている。岡村さん取材した地元記者が、生徒の絵を観賞した感想、講演の感想をまとめていたので再掲したい。く

---

★生徒、地域の皆様の感想★ ◎とても感動しました。色づかいが優しく、作品を見ていると穏やかな気持ちになりました。どの作品も細かく、丁寧に風景が描かれていて、これを口で描く岡村さんは本当にすごいなあと思いました。私はメンタルで弱く、すぐにあきらめそうになってしまうけど、そんなときは岡村さんのことを思い出して、ぐっところえて頑張ってみようと思います。◎柔道部のTシャツ、ありがとうございます！文字がとてもかっこよく、気にいっています。◎福祉に関わる身としては、岡村様ご夫妻の言葉、どちらも心にしみました。お二人の支えあっている姿が目には浮かぶようでした。ありがとうございました。◎この素敵な絵や書の奥に、どれほどの思いが込められているのだろうと思わずにはいられません。◎衝撃を受けました。心に響く作品ばかりでした。お二人の人柄がにじみでていて心があたたかくなりました。◎あらためて、人ってすごいなあって思いました。◎岡村さんの絵を見て、あきらめずに、何でもチャレンジすることが大切なんだということ学びました。

### (出会いや思いを絵に込めて)

岡村さんは事故後、絶望のなかで周囲にきつくあたったこともあったという。そんな中、絵を描くことによって見出したものはなにか。2017年に開催された個展「原風景」の紹介パネルには、こう記されていたという。～口筆で心・光・力を～。「心」は「優しさと思いやり」。「光」は「目標と希望」。「力」は「行動と努力」

それらは事故によって一旦は失ったものかもしれない。しかし、岡村さんは絵を描くことによってそれらを再び手にし、絵筆に込めて描き続けている。

### (奥様とのコラボレーション)

奥様岡村真知子さんは、地元の子どもたちに書を教えている。今回の水彩画展にも、要所要所に奥様の書が展示されていた。一部紹介したい。

「介護という無償の仕事。一人には一人でしないさせない抱えない。する側もされる側も孤独にならないことが大事なのです。」

「涙は悲しいから出たんじゃないって。感動したから出たんだよって、私の書を読んで夫は言った。それまで私は気づかずにいた。苦労話が悲しいのではなく、今こうしていることに感動しているということに。」

---

(夫婦で奏でる恋するフォーチュンクッキー)

岡村さんの奥様真知子さんは、書の先生であり、会場には奥様の書も展示されていた。中でも奥様が書き上げた、恋するフォーチュンクッキーの書(歌詞)には、これまでご苦勞のあった、御夫妻の心の絆を表しているようで、感銘を受けてしまった。

恋するフォーチュンクッキー!

未来はそんな悪くないよ

Hey! Hey! Hey!

人生捨てたもんじゃないよね

あっと驚く奇跡が起きる

あなたとどこかで愛し合える予感

私にとっては、心洗われる水彩画展であった。岡村さんご夫妻に感謝！未来はそんな悪くないよ！ 人生捨てたもんじゃないよね！ あっと驚く奇跡が起きる。 予感

---